座長のまとめ

第1群の座長をつとめて

中　田　恵　子
（やわたメディカルセンター）

第2回看護実践学会学術集会におきまして、第1群、一般演題3題の座長をつとめさせていただきました。第1席「介護保険施設における入浴できない利用者に対する清潔ケアの現状」（発表者　新潟大学医学部保健学科　齋藤君枝さん）は、介護保険施設では入浴できない利用者に対しどのような清潔ケアや方法が選択されているか明らかでなく、安全で身体負担の少ない清潔ケアの開発を目的に質問紙法により実態を調査されました。清潔ケアの頻度は週1回が多く、介護士はもっと清潔ケアを取り入れたいと思っているが、ケアの際には腰痛などの身体負担があり、今後、安全で適切なケア方法の開発が望まれるという結果でした。発表時のデータの示し方がとてもわかりやすく介護保険施設での清潔ケアの現状が伝わりました。この結果を踏まえ身体負担の少ない清潔ケアの開発に期待したいと思います。第2席「紙オムツを使用している児へのおしりケアの現状－母親にアンケート調査をおこなって－」（発表者　公立能登総合病院　築山悠さん）は、患児のおしりケア方法にオムツかぶれを引き起こす原因があるのではないか、ケア内容を知り、改善することを目的に母親にアンケート調査されました。多くの児がオムツかぶれに罹患していること、拭き残しの確認は大半の母親ができているが、おしり拭きで皮膚を強く拭いたりこすったりしている事がわかりました。会場からは同一のオムツを使用しているのかなどの質問もあり、現場に即した興味深い内容でした。今後のおしりケアの発展につながるものと思います。第3席「受け持ち看護師が提供すべき良い看護とは－手術目的の患者に提供する看護に焦点をあてて－」（発表者　金沢大学附属病院　高森理佳さん）は、術後HCUで過ごす患者に受け持ち看護師の提供すべき良い看護として看護師が考えている内容をアンケート調査の結果からコード化し、【接遇】【情報収集】【個別性に沿ったケア】【環境適応に関するケア】【共感的な関わり】【調整】の6つのカテゴリーを導き出したという発表でした。会場からは受け持ち看護師の決定などについて質問があり、今後の患者との関わりにおいて大変参考になる内容が示唆されていました。最後になりましたが、看護実践学会の更なる発展をお祈りいたします。また、座長の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

第2群の座長をつとめて

吉　野　幸　枝
（石川県立総合病院）

第2群発表は、エンゼルケア、褥瘡発生予防、看護師の職務満足度、転倒予防プログラムの開発の4題であり、臨床現場からの発信、看護師の意識調査、文献からの叡智を実践現場へと大変興味深い発表でした。

第1席「看護師がエンゼルケアにこだわりを持つ理由－アンケートを用いた実態調査－」（発表者やわたメディカルセンター　柿田真弓さん）は、実際のエンゼルケア場面において、個人が自分なりの方法で行っており、そこに個人のケアへのこだわりや理由があると考え、それらを明らかにする研究でした。保清についてこだわる内容と理由をカテゴリー化されたものであり、質的、量的内容が含まれ難しい研究でした。この研究内容が、家族をも含めたエンゼルケアに発展されていくと思われます。

第2席「整形外科術後患者における褥瘡発生予防方法の検討－リハビリ対応超薄型エアマットレスを使用して－」（発表者　金沢大学付属病院　坂下寿里さん）は、褥瘡発生予防において、整形外科術後患者に限定し、18年度に褥瘡発生した患者の状況や経過を振り返ることにより、リハビリ対応超薄型エアマットを使用すれば褥瘡発生を防止できると仮説をたて、実験研究をされました。仮説通り、このマットを使用することにより、褥瘡発生者はいませんでしたが、有意差までは得られていません。今後も研究の継続と発展が期待されます。

第3席「奥能登地域で類似する4病院看護師の職務満足度の検討」（発表者　公立宇出津総合病院　山岸洋子さん）は、看護師確保が困難な地域の4病院が協力し、看護師の職務満足度と定着性を調査した研究でした。都市の先行研究と比較すると職務満足度は低値ですが、定着性では概ね同じです。今後、職務満足度を高めるには、地域医療の問題と関連する「給料の見直し」「労働条件の改善」などの政策が必要なことや、定着性の阻害要因として「業務の低い達成感」「専門職としての不満」が関与しており、業務改善が必要なことが明らかになりました。

第4席「施設高齢者の転倒リスクに応じた転倒予防プログラムの開発（第1報）」（発表者　新潟大学医学部保健学科　加藤真由美さん）は、施設高齢者を対象に複数の転倒要因を標的とした転倒予防について、文献検討を行いました。個々に応じた転倒予防プログラムを開発する中で、内容や開発における課題を明らかにする研究でした。そして、プログラムの骨子として、職員教育・個の転倒リスクを見極めるアセスメント等を導きました。また、プログラム内容を構成すると同時に、スタッフへの転倒予防に対する意欲や動機づけの必要が課題として挙がり、臨床現場で参考になると思われます。今後、第2報が準備されており、研究の継続と発展が期待されます。

最後に、座長の機会をいただきましたことに感謝いたします。

第3群の座長をつとめて

山　岸　映　子
（石川県立看護大学）

第3群は全て学会企画の共同研究チームによる研究発表です。糖尿病ケア、転倒予防、褥瘡予防および精神看護の共同研究チームから4題の研究が発表されました。

第1席は糖尿病ケア共同研究チームによる「インスリン療法をうける2型糖尿病患者のシックデイ経験とその対処方法－第1報－」（発表者 公立羽咋病院 村田信子さん）です。インスリン治療を1年以上続けている53名の通院患者に対し食事摂取不可能経験の有無とその対処およびコントロール状況等について面接質問調査による実態調査を行い、これまで行われてきたシックデイに対する指導のあり方を検討しています。インスリン自己注射を行う高齢者が増大する中、シックデイに対するより適切な支援は重要であり、今後研究結果がシックデイに対する実際的な指導実践に活かされることと思われます。

第2席は転倒予防共同研究チームによる「転倒転落予測アセスメントツール使用の実態－石川県内100床以上の病院を通じて－」（発表者 芳珠記念病院 東栄美子さん）です。転倒転落予測アセスメントツールの効果的な活用に向け、石川県内の100床以上の47施設を対象に質問紙調査を行い、回答の得られた30施設（63.8%）のうちツールを使用している28（93.3%）施設について、ツール内容およびツールの活用実態を明らかにしています。多くの施設でツールが使用されているにもかかわらずそれらの有効活用に多くの課題があることが明らかにされ、今後の研究の発展が期待されます。

第3席は褥瘡共同研究チームによる「深い褥瘡に対する振動器による加振の治癒促進効果」（発表者 公立羽咋病院 尾崎真裕美さん）です。2施設において深い褥瘡を生じた患者8名を加振群、非加振群に分け、加振の治癒促進効果を壊死組織の割合と肉芽組織の色彩で評価し、比較検討した

ものです。今回は対象数が少なく加振による治癒促進効果を明確化するまではいきませんでしたが、今後さらなる研究が期待されるとともに、多施設間の研究協力が必要と思われます。

第4席は精神看護共同研究チームによる「事例検討会というグループにおける事例提供者の体験－より効果的な事例検討会のあり方について－」（発表者　松原病院 吉野暁和氏）です。精神看護に関する事例検討会に事例提供者として参加した7名を2グループに分けたフォーカスグループインタビューによる質的分析から、より効果的な事例検討会のあり方を事例提供者側の視点から検討したものです。

以上4題の詳細については第2回看護実践学会学術集会講演集をお読みいただきたいと思います。いずれの発表に対してもフロアから活発な質疑や意見をたくさんいただくことができました。それらはどれもよりよい研究をめざすために、研究結果が一般化できるものとなるためには不可欠な、大変有意義なものばかりでした。座長として感謝申し上げますとともに、時間を延長してしまいご迷惑をおかけしましたことを心からお詫び申し上げます。

第4群（示説）の座長をつとめて

嵐　公江
（公立羽咋病院）

第2回看護実践学会学術集会第4群の発表として、4席の示説発表が行われました。

第1席「外来看護師の当直翌日の半日業務における眠気・だるさの軽減－シャワー浴を試みて－」（発表者　珠洲市総合病院　岸田富子さん）2次救急医療を担う中小規模病院においては、日勤から引き続いての外来当直業務は必須業務です。外来当直翌日の半日業務に対しての眠気だるさの軽減を、疲労度の尺度で比較することにより、シャワー浴の効果を分析する研究でした。外来当直後のシャワー浴は、半日業務中の眠気・だるさの回復に効果があり、すっきり度測定ではシャワー浴ありの昼では、すっきり感が改善傾向にあるとの示唆がされました。参加者からは、当直回数、患者数など具体的な意見交換が行われました。

第2席「よりよい手術室環境への工夫－ドアの開閉に関する実態調査－」（発表者　やわたメディカルセンター　中島和香子さん）手術室のドアの開閉の回数を調べ、だれが、何のため、何回開閉するかの実態を明らかにし、開閉数の減少方法について検討することを目的とした研究でした。ドアの開閉数を減少するためには、物品を出さなくてもいい方法や、手術の組み合わせの検討することが必要と示唆されました。各病院の体制が違いますが、研究方法についての意見交換がなされました。

第3席「男子学生が臨地実習で受ける性差への配慮の実感と要望」（発表者　金沢医科大学付属看護専門学校　坪本他喜子さん）「男子学生に対する看護教育研究班」で、男子学生に対して看護教育の検討資料とすることを目的として『臨地実習で女性患者を受け持った時に受ける性差への配慮の実感・要望』のアンケートを行った結果が発表されました。参加者からは、男子看護学生の受け持ちを決める時にはあらかじめ配慮している、一般病院で男性看護師が就職することへの影響はあるのか、男性看護師は年間何名ほど卒業するのか（約40名）、男性看護師が一般病院で働く現場は、など質疑応答がなされました。

第4席「2交替制勤務導入の評価－3交替者と2交替希望者のみをミックスした勤務状況において－」（発表者　山中温泉医療センター　田畑佳代子さん）同じ病棟内で希望する人だけが2交替勤務を行い、それ以外の人は従来の3交替を行う2交替と3交替をミックスした勤務の導入を行い、導入前後での作業能率と疲労度の視点で評価され報告がされました。作業能率に差はなく、疲労度調査としてスタンフォード眠気尺度では、導入後に眠気が軽減された結果が得られたとの報告がされました。また、山中医療センターは、日本看護協会「看護職の多様な勤務形態導入モデル事業」としての事業も取り組んでいらっしゃいます。参

加者には管理者が多く、看護職員のワークライフバランスの視点から活発な意見交換がなされました。

発表場所は、メイン会場への通路でしたが、ガラス窓での開放感があり、各発表に対し示説ならではの研究者・フロアとの活発な質疑や意見交換が行うことができたと思います。今後も、この会が、看護の現場からの諸問題が研究され・発表の場となり、看護の実践の情報交換の場となることを期待いたします。

また、今回座長の機会をいただきましたことに感謝いたします。

交流集会１
「新人看護師の転倒リスクマネジメント能力 ―いかに、その力を引き出し育むか―」を担当して

丸　岡　直　子
（石川県立看護大学）

交流集会１では、「新人看護師の転倒リスクマネジメント能力－いかに、その力を引き出し育むか－」をテーマに、転倒に関する研究の第一人者である金沢大学の泉キヨ子先生とリスクマネジメント教育に関する研究テーマに関心をもつ石川県立看護大学の寺井梨恵子先生と３名で担当しました。

この交流集会を企画した理由は２つありました。１点目には、新人看護師の職場適応や教育支援が現在の看護管理の課題となっていることが背景にあります。２点目には、新人看護師が臨床での様々なことに遭遇する中で、いわゆるヒヤリ・ハット体験が新人看護師に与える影響は大きいことがあげられます。そこで、私達は新人看護師が遭遇する頻度の高い入院患者の「転倒（転落を含む）」を取り上げ、新人看護師の転倒リスクマネジメント能力の特徴と、その能力をいかに向上させるかについて参加者の皆様とディスカッションを深めることをねらいとしました。

まず、担当者らがこれまでに取り組んできた「新人看護師の転倒リスクマネジメント能力の形成」に関する研究結果の概要を報告させていただきました。その内容は、新人看護師の転倒リスクマネジメントの有り様が１年間で大きく変化すること、またその能力は経験学習のサイクルをたどること、看護チームの一員としての防止行動の実行や責任の自覚には先輩との関係性が関与していることです。

つぎに、新人看護師の転倒リスクマネジメント能力の向上を目ざした取り組みについて全体討議をすすめました。まず、担当者からは、転倒場面を振り返りながら転倒防止に必要な行動指針を導き出して防止行動に活用するという経験学習のプロセスを促すことや、先輩看護師によるモデリング、転倒予測の判断根拠となる知識の蓄積方法についての提示を行いました。会場からは、新人看護師の成長過程を理解することの重要性や、ＫＹＴ（危険予知訓練）を先輩看護師と新人看護師が共に行うことによって、先輩看護師も新人看護師のリスクマネジメント能力を理解することができ、効果的にフォローすることができるという取り組みが紹介されました。

初めて交流集会を担当させていただき、これまで取り組んできた研究について紹介させていただく機会を得ましたことに感謝しております。昼食時間を利用して、多くの方々に参加いただき、あらためて転倒防止や新人看護師に対する関心の高さを感じました。転倒は環境要因、患者要因、さらにはケア提供側の要因が複雑に絡んで発生します。少しでも転倒の発生を少なくするために、ケアを提供する看護師の転倒リスクマネジマント能力をいかに高めていくかについて、今後も検討を深めたいと思います。

参加いただいた皆様、さらにご意見をいただきました皆様に、あらためてお礼申し上げます。